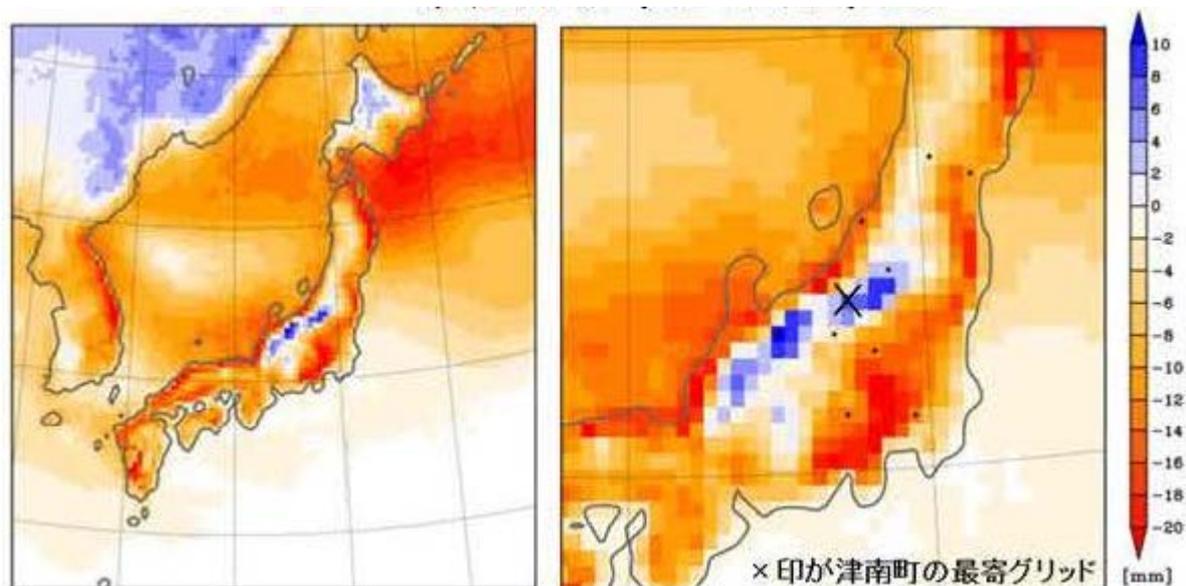


2016 霜月の夢「地球温暖化 A.D.2100 の豪雪と水力発電」

気象庁気象研究所(報道発表,2016年9月23日)によれば、「政策的な地球温暖化の緩和策が行われず、放射強制力が2100年の時点で $8.5\text{W}/\text{m}^2$ を超え、現在よりも地球の平均気温が3度以上高くなり、その後も気温の上昇が続く」RCP8.5シナリオでは、北アルプスの日本海側北陸地方、即ち、福井、石川、富山、新潟各県の山岳部、および北海道の内陸部で気温零度以下となる時季に、豪雪が現在より高頻度で現れ、豪雪に伴う降雪量も増加する可能性が高いと警鐘を鳴らしています。



気象研究所提供の資料によれば、日本および日本周辺域における降雪の将来変化の特徴は青い領域で降雪量が増加し、上図のように表現されています。

NHK マイあさラジオ「著者に聞きたい本のツボ」(2016年9月25日 AM6:40~6:55)で、「水力発電が日本を救う」(東洋経済新報社,2016年9月1日発行)の著者 竹村公太郎さん(元国土交通省河川局長)が、100年後の持続可能な日本のための秘策として、世界でも稀な「地形」と「気象」でエネルギー大国になれる！ 発電施設のないダムにも発電機を付けるなど既存ダムを徹底活用せよ！ 新規のダム建設は不要！ 今あるダムで年間2兆円超の電力を増やせると、丁寧に語っておられました。

その要旨は、①発電に注目した既存ダムの運用の変更、②既存ダムの嵩上げによる電力増強、③発電していないダムに発電させる、④逆調整池ダム建設によるピーク需要への対応、⑤水源地域の持続可能な活性化の発電モデルとして水源地域が主体となった小水力発電事業の推進、ということです。

さて、以上の2つの論文の帰結は、北陸地方、即ち、福井、石川、富山、新潟各県の山岳部、および北海道の内陸部の豪雪地帯の水力発電に、100年後の持続可能な日本のための秘策①~⑤を計画的に適用、実行して行くことだと考えます。(文責 アーキジオ春秋)